

## 〔病・虫害発生概況〕

## 〔病 害〕

昭和45年度の病害の発生状況は、水稲ではいもち病、白葉枯病、紋枯病が発生し、特に北部九州では葉いもちの被害が平年より多かった。さらに北部九州では萎縮病の発生が漸増し、また中生種の品種に靱枯細菌病の発生がみられた。麦では赤かび病がまんえんした。野菜類では、ウイルス病の発生が多く、特にウリ類のカボチャ・モザイク・ウイルスによる被害が大きく、また全般的にはキュウリのべと病の発生が多かった。その他の病害は平年にくらべて少または並発生であった。

## 稲 病 害

葉いもちは、早期水稲では例年にくらべて初発が遅く、しかも苗代での発生が少なく、本田においても山間、山麓地帯の一部に発生がみられたが平年にくらべて少発生であった。普通期水稲では6月中～下旬の低温と日照不足のため苗代後期に苗いもちが増加したため本田持ち込みが多く、さらに7月中旬の低温少照により葉いもちが発生し、特に山間、山麓地帯および長崎の五島、壱岐で多発し、進行型病斑が多くみられ、一部ではズリコミを呈した。品種ではレイホウ、日本晴に少なく、トヨタマ、ホウヨク、コクマサリ、アリアケなどに多発がみられた。南九州では葉いもちの発生が例年にくらべて遅く、本田植付後も7月上～中旬に一時的病勢進展がみられたが7月下旬には停滞し、山間地や多肥田で多くみられたが全般的に少発生であった。北部九州では葉いもちが後期まで残存し、9月中旬以降の長雨により山間部を中心に穂いもちの発生が多く、平坦部においても多肥田などではかなりの発生がみられ、特に枝梗いもちの発生が多かった。南九州では穂いもちの発生は平年にくらべて少であった。紋枯病は、早期水稲では初発生が平年にくらべてやや早く、その後6月の病勢進展はかんまんであったが、7月上

～中旬の出穂後に進展がみられやや多発生であった。普通期水稲では、8月中旬までは進展はゆるやかであったが、出穂期以降の高温、多雨のため後期に上位葉への病勢進展が著しく、発病株率は平年より少であったが、上葉の枯死、坪状発生、倒伏が例年にくらべて多く、平年並みの被害を生じた。白葉枯病は、北部九州では初発生が7月中旬で例年より早く、しかも発病程度が高かった。さらに8月の台風9号でまんえんし、9月以降の不順な天候で病勢が助長され、上位葉での発病が多く、全般的に発生面積、被害程度ともに平年より多かった。福岡、長崎、熊本では、出穂期高温のため靱枯細菌病が発生し、特に稚苗移植栽培が目立った。品種では、本年はホウヨク級の中生種に多く、これより早い品種および晩生種にはほとんど認められなかった。福岡では、小粒菌核病菌による穂枯れが発生し、品種によって発病差がみられトヨタマに多かった。北部および中部九州では、ツマグロヨコバイ越冬Ⅲ代幼虫、第2回成虫の生息密度が高く、しかも苗代期～本田初期のツマグロ防除が降雨により不徹底のため萎縮病の発生および被害が平年にくらべて多かった。イネえそモザイク病は、大分の大分市、中津市、杵築市、大野郡、玖珠郡、速見郡で新たに発生を確認された。

## 麦 類 病 害

麦さび病は、麦の生育がおくれ、生育不良であったため初発生がおくれ発生少であった。赤かび病は福岡、長崎、熊本、大分、宮崎で発生し、小麦での初発は4月下旬で平年並またはややおくれたが、5月上旬には各地で発生がみられるようになり、中旬以降急速に進展し、特に裸麦での発生が多かった。5月後半には小麦での発生が急増し、平年にくらべてやや多発であった。うどんこ病は、大分では発生時期は遅れたが、5月中旬の天候回復により発生面積は漸増し、大分の中北部沿海地帯一部に多発した。

## 野菜類の病害

抑制栽培トマトでは、青枯病は長崎、熊本で10月

上～下旬に多発生し、熊本では半促成栽培トマトにTMV-トマト系によるモザイク病の発生が2月中旬からみられ、3月中旬にはかなりまんえんした。また半促成ハウス栽培トマトに萎凋現象がみられ、TMV-トマト系ウイルスの検出されるものが多かった。露地栽培トマトでは、長崎で疫病、灰色かび病、大分では斑点細菌病、宮崎では疫病、軟腐病が梅雨期に多発した。ウリ類の病害では、熊本、大分、宮崎のハウス栽培キュウリにべと病が多発生し、露地栽培キュウリでは長崎で灰色かび病、熊本ではべと病が多発生した。宮崎では、秋作キュウリがモザイク病のため大きな被害をうけた。スイカでは、6月中～下旬の梅雨期に炭疽病が発生し、長崎、熊本、大分、宮崎で被害を生じた。また鹿児島ではキュウリ・緑斑モザイク・ウイルスによるスイカの被害が発生した。メロンでは、長崎で炭疽病、熊本では6月中～下旬に疫病の発生がかなりみられた。宮崎では、トンネル早期栽培カボチャで5～6月の長雨のため果実疫病による被害が著しく、また露地抑制栽培ではモザイク病の発生が目立った。ハクサイ、カンラン、ダイコンなど根菜類では、9月中旬～10月中旬の高温、多雨、少照のため長崎、熊本、鹿児島で軟腐病の発生が多く、熊本、宮崎では10月上～下旬にハクサイ、ダイコンのモザイク病の発生が多かった。大分ではカンラン黒腐病、ネギさび病が発生した。宮崎ではサトイモの苗床腐敗、大分ではサトイモ根こぶ線虫病の多発生があった。

### その他の病害

馬鈴薯疫病は、長崎では5月上旬の高温、多雨、少照が初発を促し、6月中～下旬に病勢が進展しやや多発であった。馬鈴薯葉捲病は、長崎では10月下旬より発生がみとめられ多発した。果樹では、カンキツのそうか病、かいよう病、こくてん病が4月～6月の多雨によって全般的に発生が多かった。

(九州農業試験場)

### [ 虫 害 ]

昭和45年度は、虫害にとって大体平穏な年であったといえよう。ニカメイチュウは北部九州では全般

に発生がや、おくれ、防除上問題になった地帯も見られたが、大した被害には至らなかった。鹿児島、宮崎では一部前年に引続いて多発した地方が見られた。サンカメイチュウは、鹿児島県大隅地方で白穂群が見られたこと、長崎県針尾地方で局所的に発生が見られた他は殆んど発生をみていない。ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイの発生量は例年程度であった。ツマグロヨコバイによるイネ萎縮病の発生は休耕地の周辺数m以内でとくに多発生した例が数多く報告され、今後の増加が懸念される(熊本、佐賀)。一方ヒメトビウンカによるイネ縞葉枯病の場合、九州全般に保毒虫率が非常に低くなっており、休耕地との関係も殆んど見られていないが、今後はイネ萎縮病同様注意を続ける必要があると考えられる。ヤジロウンカ、トビロウンカの飛来数は半年並であったが、飛来時期が、梅雨明け後の7月20日から25日にかけてであったため、とくにトビロウンカの定着が良く、その後の密度も高く経過し、出穂後、登熟期にかけて典型的な埋枯れ被害を出した地方が見られた。防除意欲の低下とともに、防除適期を失したと思われる事例が西九州地方に多かった。

カメムシ類は、宮崎県では、前年度からの防除が効果を上げ、今年度は被害も減少した。鹿児島では被害が増加の傾向にあり、9種のカメムシが見出されたが、とくに重要なものはクモヘリカメムシとミナミアオカメムシであった。

本年、天草地域の早期栽培および、阿蘇地域の早植栽培において、イネヒメハモグリバエがや、多発した。近年同地域一部にその発生がみとめられており、年々その範囲が拡大しつつあったが、本年はとくに広範囲に発生がみられた。

その他水稻の害虫としては、宮崎、長崎ではコブノメイガの被害がみとめられた。

新規に開発した大規模草地におけるアワヨトウの異常発生がここ数年来問題になっており(長崎、鹿児島)、発生予察法の確立が必要である。また熊本県台地地帯のコガネムシの多発生はつづいており、鹿児島でも川内地区の改良牧野にクロコガネ幼虫の局所的多発生が見られた。

(九州農業試験場)